



第28回

父の「復興アルバム」

※2023年1月の毎日新聞記事を元にした文章です。

校閲し、直すべきところを指摘してください。

1995年の阪神大震災直後から被災地を歩き、変わりゆく街の様子を約12年間、撮影し続けた男性がいる。神戸市垂水区の元会社役員、成生統男なるおつねおさん。撮影磁気や場所ごとに整理された写真は約2

500枚、アルバム10冊分。家族がその存在に気付き、成生さんと相談して2022年1月、大学へ寄贈した。名もなきカメラマンが見つめた復興の記録――。

95年1月17日。神戸市は最大震度7の激しい揺れに襲われた。成生さんは当時、自宅1階の台所で朝食の準備をしていた。幸いけがや家屋の損壊はなかった。しかし大阪市内の会社に出勤しようにも、電車は動かなかった。3日後、JR三宮駅を利用し改札を出た途端、

目を疑った。いつもの通勤で見慣れた景色が一変しており、「魂が揺さぶられた」という。写真を趣味にしていた成生さんは使い切りカメラを買い、記録に残すことを決めた。

多くの若者でにぎわってきた三宮センター街はアーケードが崩落。三ノ宮の「顔」として親しまれてきたデパート「そごう神戸店」（現神戸阪急）も大きな被害を受け、外壁が無残にはがれ落ちていた。成生さんは休日たびに被災地に足を運び、撮影した写真には1枚ずつ、日時や場所、短いコメントを書き沿えて整理した。

撮影場所は神戸市や兵庫県西ノ宮市、芦屋市など約700カ所にわたる。見る陰もなく変わり果て

た市街地、更地のまま放置された住宅地、復興を遂げる商業施設。定点撮影で、年月とともに変化する街並みをフィルムに収めた。

神戸市長田区の東遊園地で開催される追悼行事にも毎年参加していた成生さんだが、妻治子さんと次女恵さんは無感心だった。

しかし、21年9月、成生さんが介護施設に入所することになり、2人が部屋の整理を始めた時、書棚にアルバムが置かれていることに気付いた。

初めて夫のアルバムをめくるうちに、治子さんの目に涙がこぼれ落ちた。「お父さんよくやってたなあ。私は何もしてあげられなかった」

写真に登場するそれぞれの場所は、家族の思い出の地でもあった。半壊したそごう神戸店の写真を見た恵さんは「家族と一緒に買い物をしたり、食事したりした。その思い出までもが崩れ落ちたようので、当時はさみしかった」と振り返った。

その後、そごう神戸店が1年半足らずで復興した姿を記録した写真を見つけると、恵さんは表情をほころばせた。

写真を震災の記録継承や防災教育に役立てほしい――。成生さんの意向を受け、23年の1月11日、アルバムを神戸女学院大（神戸市中央区）の現代社会学部社会防災学科に寄贈した。前林清和・学長は「被災地を丹念に歩き、定期的に撮影された極めて重要な記録集として学術的に価値がある」と感謝している。